有島武郎著作集第十一輯『惜みなく愛は奪ふ』を読む㈠

―エピグラフ解釈・自註分析を中心に―

宮野光男

一

有島武郎著作第十一輯『惜みなく愛は奪ふ』は、大正九年三月に刊行された。第十輯『三部曲』刊行の三か月後のことである。

『三部曲』刊行直後から有島には、ひそかに志すところがあった。そのことを伝えているのが吹田順助あての書簡である。

「三部曲」が出来ましたから別便で御届けします。これが私の旧衣を脱する最後のものです。この次には論文、それから来年の六月頃「新小説」に何か長いものを書かねばならぬかと思つてゐます。その作では新しい衣裳を着て見たいと思つてゐます。〔大8・12・16〕

このところで言っている〈論文〉が「惜みなく愛は奪ふ」であり、〈新小説〉の〈何か長いもの〉が、未完の作品「運命の訴へ」[註1]であることはよく知られているところである。

有島がなぜこのような思いを抱いたのかということについては、折りにふれて述べてきたところであるが、ひとまず、それを振り返って見ることにしよう。筆者の有島が、〈新しい衣裳を着〉ることを志して、言わば背水の陣でこのエッセイを書いたように、「惜みなく愛は奪ふ」の考察は、有島武郎の文学を読もうと思っている者にとっても、それは有島論の、ある意味での集大成であることを求められているからである。

少なくとも「三部曲」において意図したもの、――それは、〈一、エホバ(愛義)より「父なる神」への推移。二、両性間の憧憬、争闘、調和。三、生命の向上、生命の向下、及生命の自足。〉〔大9・1・19〕という――が成就しなかったからこそ、過去を省みて欠けたるものを補うべく、このような思いを述べたのであろう。これもやはり吹田順助あての書簡に記されたことであるが、それは、神との関係の回復と、男と女との関係における交わりの関係回復とが、表裏一体をなした形において可能であることを実証しようとしたものである。有島はその状況を〈調和〉という言葉で表現しているのであるが、それは、有島の理想とするところの愛の論理が実現するはずの世界の謂なのである。その調和は、「聖餐」論のなかですでに述

べてきた[註2]有島の理想的女性像である〈poetic woman〉であるマグダラのマリアによって成就した愛の姿として描き出そうとした世界のことなのである。

結論から云えばこの試みは失敗だったのである。マリアの愛にも拘らず、有島はついに復活のイエスを描くことができなかったと言う意味で、マリアに〈生命の自足〉を与えることのできる〈調和〉は、不可能だったのである。このことは、人間の絶望を救う〈生の論理〉を、これまでのような人間理解のなかには見出し得ないのだという、より深い絶望感の表出である〈闇の認識〉をもって表現されていたのである。

マリアの、〈おお世界が闇になつて行く〉という呟きには、有島の求め続けた愛の論理が、ついに不毛に終わらざるを得なかったことが象徴的に描きだされているのである。なればこそ、有島が、〈これが私の旧衣を脱する最後のものです〉と書き送ることによって、「聖餐」において描かれた愛の世界が、調和を可能にする論理でないだけでなく、むしろ死を予察する可能性だけだという意味で過去のものとして葬り去られ、それとは異なった可能性を求める、さらに新しい愛の論理が求められなくてはならないものであることを確認しなければならなかったのである。

つまり、有島の「聖餐」の目論見のなかに見られるマリアの、キリストのよき理解者としての役割が、もっとも愛している者であるにもかかわらず、人間の限界状況としての死を予察するという意味で、有島にとってはそれは、〈旧衣〉でしかなかったのである。

その有島に残された可能性はといえば、調和志向の誤りであったことを述べるか、あるいは、死の論理の正当化だけである。愛の可能性を語って〈調和〉と相反する状況を正当化し、また、死の論理の正当化をしなければならないということは、まことに不幸なことであるが、考えてみれば「聖餐」の目論見が『聖餐』〔大10・2〕において〈誰にも意外であつたキリストの突然の捕縛と死刑とが、一人の女子に予めキリスト自身に由つて告げ知らされてゐたに違ひない〉と述べられているように、さらに遡れば、poetic woman の本質として、もっとも愛する者の死をその愛の故に予察しなければならなかった者であることを思い描いていることにおいて、すでに有島の基本的な人間観であったことを知ることができるのであるが、いま、ここで、それを〈旧衣〉として否定しようとしているということは、その根拠をも含めて、新しい生の可能性を追及しようとしている有島の姿を見出すことができるところなのである。

有島の、〈旧衣を脱し〉て〈新しい衣裳を着〉たいと言う願いは、札幌農学校の学生時代に、新渡戸稲造のもとで学んだカーライルの「衣裳哲学」を通して、〈人間は、権威、美、呪詛その他を、衣服としてまとっている[註3]〉ことを学んだことに端を発しているのであろうが、さらにその考え方の背後には、〈あなたがたは、古き人をその行いと一緒に脱ぎ捨て、造り主のかたちに従って新しくされ、真の知識に至る新しき人を着たのである[註4]〉という聖書の言葉を想起することができるように、有島の〈新しい衣裳〉志向は、その本質において聖書的な発想だということができるのであるが、この思いは、たとえば新生願望として顕在化し、あるときには、瞳憧憬として、またあるときには Ego でしかありえない人間が、poetic woman

たることの願いとして有島の思いのなかで醸成され育まれてきたものであり、けっして否定的なものではなかったはずのものなのである。

「惜みなく愛は奪ふ」というタイトルが示しているように、それらの思いの中心をなしているものが〈愛〉であることは、今更多言を要しないことであろう。全き愛を求めたEgoは有島の心中深く潜み命脈を保ちつつ、ふたたび、このところに姿を現したということができるのである。

有島武郎著作集第十一輯『惜みなく愛は奪ふ』に収録されている表題エッセイとその他のいくつかのエッセイが、有島の求めた新しい愛の論理を明確に表明したものであるかいなかを考察することが中心課題になるのであるが、例によって、この問題解明のために、エピグラフの検討をとおして進めてみたいと思う。このことは、各著作集の固有のテーマが、愛追及の内的必然性の一つであることを述べた論の帰結点であることを実証することでもある。

二

有島武郎著作集第十一輯のエピグラフには二篇のホイットマン詩が採用されている。これらの詩は、ホイットマン詩としては、比較的著明な作品のようである。まず、以下にその全文を示してみよう。なお、最初の詩は、詩群「カラマス」のなかの一篇である。これに対して、二番目の詩は、題詩「ぼく自身の歌」の第二十歌の後半の部分の一節である。

Sometimes with one I love, I fill myself with rage, for
　fear I effuse unreturn'd love;
But now I think there is no unreturn'd love,—the pay is
　certain, one way or another;
(I love a certain person ardently, and my love was not
return'd; Yet out of that, I have written these songs.)

時たま私の愛するものに対して、私は憤りに満たされる、私は報はれない愛を浪費してゐるのではないかと思ふから、
然し今私は思ふ、世に報はれない愛はない——かうかあゝか兎に角返報はたしかだ。
(私は一人の人を心から愛した、而して私の愛は報はれなかった、然しそれあるがために、私はこれらの詩をば書き得たのだ)。〔有島訳「時たま私の愛するものに対して」〕

I exist as I am—that is enough;
If no other in the world be aware, I sit content;
And if each and all be aware, I sit content.
One world is aware, and by far the largest to me, and
　that is myself;
And whether I come to my own to-day, or in ten
　thousand or ten million years,
I can cheerfully take it now, or with equal cheerfullness
I can wait.

私はありのままに存在する――それで沢山だ、
誰もが私に頓着しないからといつて、私は平気だ、又誰も彼もが頓着するからといつて、私は平気だ。
そんなものより遙かに大きな一つの世界が私に注意してゐる―それは私自身だ。
而して私は今、自己を実現しようとも、千万年を待たねばならぬとも、何れにも私は等しく満足してゐるだろう。〔有島訳「自己を歌ふ」20〕

これらのホイットマン詩が有島にとっていかなる意味をもったものであるかを、有島がこれらの詩をエッセイのなかに引用しているところを取り上げて考察して見たいと思ふ。

ホイットマンがかゝる黙殺と軽侮との間に立つて取つた態度は涼しい大きなものだつた。彼れは未来の勝利を明かに見得る超人のやうに価値あるものゝ何時かは世を征服すべきを信じて疑はぬ楽天家のやうに、平気で最後まで初一念を押通した。〔「ホイットマンの一断面」大2・6〕

ホイットマンの、詩人としての不遇に対して、彼自身がいかに対処していたかを述べ、その中に見られる彼のたくましい自己肯定の姿勢を評価した後に、その根拠として、この詩を掲げてホイットマンが自らの永遠性を述べていることに注目しているところである。このところはホイットマンを語って、実は自らの存在の肯定性を述べようとしたところである。
このことを、亀井俊介氏は以下のように述べている。

前者（Sometimes with one I love……）は愛が自己への獲得であり、むくいられなかったと思われる時でも実は奪っているのだという思想の表現であり、後者（I exist……）は、世間の評価を超越した自我の徹底的肯定をうたったものである。Whitman は有島にとって、この論文の根底をなすこういう思想の鼓舞者であったのだ。(註5)

ここで言われていることは、有島のホイットマン詩解釈の全面的肯定であり、そのことを通して有島とホイットマンとの本質的一致を述べているところである。
あるいはまた、有島が自らの魂について、

魂の醜さを凝視して、その伝習的な醜の概念の後ろに潜む本体の実質を見透すべき勇気の欠乏が、人の子を駆つて永遠の漂浪に赴かせた魔の杖ではないか。「四足動物を以て被はれた」私の魂は、私の弱かつたが為めに、私の偽善者であつたが為めに、即ち私が驕慢であつたが為めに、浅ましくも肋骨の裡に汚れて屏息した。私は魂を理解する事を知つて以来、かかる悪虐を行ふことの恐ろしさに戦く。

魂の風説にばかり耳を傾けて、魂そのものゝ影も見ない人の為めに、私は如何しても魂の醜さを高調しなければならない。醜いものは肉で、醜は白玉のやうに清いものだと云はうとするのか。どうか

そんな伝説に欺かれてゐることはやめて貰ひたい。〔「草の葉」大2・7〕

と〈魂の醜さ〉を述べるとともに、この詩を引いて、醜い魂が同時にその本質において、〈私の魂は荘厳である。今まで人は言葉を尽くし心を傾けてその荘厳さを説いた。然しその人々の思ひ設けなかつた程魂は荘厳だ。私の魂は過去と現在との総和であり、未来の凡てである〉〔同前〕ほどに〈荘厳〉なる〈魂〉であるとしているのであるが、この論理は、新しい価値基準発見によって意味をもちうるものであるという意味において、ホイットマン詩が、そのための可能性の根拠として位置付けられるものであることを物語っていることにもなるのである。

否定的自己認識は、有島の特色であるが、人間存在における否定性が意味を持つことのできる世界は、人間存在のなかにその根拠を見ることは不可能である。さもなくば、それは、謙虚さに名を借りた自己肯定の変形でしかないからである。したがって、問題は、その否定的人間観の根拠は何かということである。

ここで問題になるのは、ひとつの規準に照らし合わせて、それが否定的であるかいなかということである。つまり、その基準が曖昧なときに生じる問題の一つとして、有島の発想の特色である自己肯定、自己美化をもたらすのであるが、〈醜い魂〉が聖性をその本質としているのだと見誤られることによって見失ってしまった本質であるところの〈伝習的な醜の概念の後ろに潜む本体の実質〉を、回復しようとするのが、有島の意図なのであって、それが本来的な魂であることによって、否定性のなかに無媒介のままで、肯定性を見出すことができるのだという発想の根拠として、有島はホイットマン詩 Song of myself をあげているのである。

存在するものの質的変化を伴わない価値の転換は、基準の変化の結果生じることである。有島の場合、ホイットマン詩がそれを可能にしたのだということになるのである。そのような意味のホイットマン詩がエピグラフとして掲げられているということは、価値基準の変化を意図していることになるのである。

存在の根拠を自らの聖性に置くということは、そこに端を発する全てのものが聖性であると言うことは論理的帰結である。愛がそこに根拠を置くものである限り、例えなんと名ず付けられようとも肯定的なものであることは間違いないところである。したがって、そこから生まれ出るものが、良いものでないはずはないのである。存在そのものの肯定性を裏付ける論理として展開する可能性をもった愛の論理をのべている以下の用例もその一つである。

シカもダンテといふ人はこの大きな愛を自分の心の中に置くことが出来なくて、その愛を「新生」といふ「聖曲」といふ大きな詩にまでしたてあげました。そこに出て来たものは彼の心のかけらです。彼は僅かばかりの心の破片を世の中に残して死にましたけれども、その残されたところの破片だけですらが、世界における三大傑作の一として人に謳はれて居ります。ダンテの僅かばかりの心の残り滓といったやうなもの、それがそれだけの強い力となって居る。〔「愛に就いて」大12・1〕

このところで、もう一つのエピグラフに関する有島のコメントを問題にすることになるのであるが、その特色は、愛が、ほとんど関係概念としては語られていないということである。

又私の好きなホキットマンといふ人の詩を読んで見ると「自分は嘗て或る女を心から愛した。然しその愛は酬ゐられなかつた。然し私の苦しみは無益ではなかつた。私はこの苦しみの中からこの詩を生み出したからだ」といふやうな詩がありますが、この奪ふところの愛の力といふのは以上の例の如く必ずしも相互的であるといふのを必要としない。恐らくは今迄の智的生活においては、相互に働くといふことが条件になつて居つたかと思ふが、決して本能的の愛が働き掛ける時は、奪つた場合には完全に彼に所有される。さうして若しもその愛が強ければ、奪つたものが何時までも彼の所有の中にあつて、生きて居ることが出来る。さういふものが本能の愛だと思ふのです。〔同前〕

〈奪ふ愛〉が〈必ずしも相互的であるといふのを必要としない〉というところに、その考え方がはっきり現れているようである。このところに語られている愛は、明らかに関係概念であることを逸脱しているように思われる。

石坂養平あての書簡〔大9・6・24〕のなかで、有島は、愛について、〈自由恋愛に関しては私は愛の持続性は主張しますが、恒久性はある人が信ずる如くには信じないものである事を予め御断りします。人間に一番大事は愛ですが常住なものでないと思ひます〉と述べている。その前に、本能論が〈私の習性、智的、本能的動向なるものは生命の緊張度によつて延長的に分割したものであつて、三つのものは、互いに緊密な連絡を保ち、緊張の度によつて一つの動向から他の動向に移り得るものです。だからその区別は固より仮定的なものであつて、普通智情意の場合に考へられてゐるやうに截然たるdemarcation lineのあるものではありません〉と述べていることから、全人格的なものとして規定されているものであることは明らかであるが、〈持続性〉を認めつつも〈常住なものでない〉ならば、それは一種の気分に左右されるものでしかないのではないかと思われるのである。

気分が昂揚しているとき、すべてのことは円滑に、着実に行われるにちがいない。愛することにおいてもその論理はあてはまることである。よしんばその愛の働きを妨げるものがあったとしても、それは、かえって秘めたる可能性を引き出す契機としての位置付けをすることができるのである。

若し、一方に愛が妨げられたならば、その愛が若し正しく強いものである限り、それは更に聖化させられて働いてゆかねばならぬ。ホイットマンは茲にもその気持ちを歌つて、『自分は、或る時或る人を愛したが、其の愛は報いられなかつた、さうして、見よ、其の哀愁のなかゝら此れ等の詩は生れ出た』と云ふ様なことを云つてゐる。

総てのものは積極的であらねばならぬ。自分が中心となり責任者となつて働きかけてゆかねばならぬ。愛の問題に於いても亦さう

だ。〔「愛されざるの寂しみと愛し得ざるの苦しみ」大11・3〕

この用例からも明らかなように、有島は、愛の先手による主体的愛の可能性を述べている。もち論その結果変化することのできる人間生活が〈自己の〉ものであることは、いうまでもないことである。愛が関係概念でないかぎり、それは免れることのできない運命であるが、事態はまことに孤独であることも事実である。それがホイットマンの愛の論理の正しい理解であるかいなかについては異論のあるところであろうが、すくなくとも有島はそのような愛の論理、可能性をホイットマンの愛の論理のなかに見ようとしているのである。

先にも触れたものであるが、亀井俊介氏の、〈Whitman は有島にとって、この論文の根底をなすこういう思想の鼓舞者であったのだ〉という考え方もそのことを言い表しているところである。

ここで、ホイットマンが歌った un return'd love といっているのは、対象とする実在のXなる女性であって、I think there is no unreturn'd love と記したのは、相手の女性から投じた影が自己の崇高な魂へ蘇ったことを意味する。つまり、ホイットマンにとって、Xなる女性の存在は問題ではない。ホイットマンの愛した女性の魂にホイットマンの愛を受け入れる光が生じなかっただけのことである。いいかえれば、上の詩はもちろんいわゆる失恋の詩ではない。報われぬ愛が、ホイットマン自身をしてすぐれた数々の詩を書かせたと訴えているのは、愛又は、恋というパトスは、そうした感情を創造した自己自身の魂の高まりに過ぎないからである。(註6)

エピグラフとして掲げられている第一の詩についての解釈のひとつであるが、このところで、鈴木氏が述べているのは、〈愛又は、恋というパトスは、そうした感情を創造した自己自身の魂の高まりに過ぎないからである〉というところからも明らかであるように、関係概念としての愛ではない、ということであろう。あえていえば、自己投影としての愛だと言っているようである。

関係概念としての愛ではない愛についてのもう一つの考え方として、鈴木鎮平氏の〈神の座〉(註7)説がある。

氏は有島の個性論についてその思想形成にホイットマンは〈根本的には与らなかった〉ことを指摘し、その論理がそっくりそのまま有島の愛の論理にもあてはまることだとして、以下のようにのべていると述べている。

氏によれば、有島がホイットマンの第四の特色として〈愛〉を語る場合、〈これを有島が愛の詩の例証としたのは適当ではない〉詩を掲げていることをあげ、その理由として、〈それをあえてした有島の意図を探るならば、ここで有島はすべての統御者たる尊厳な神の座を愛に付与しようという、実に第二稿「惜しみなく愛は奪う」の祖述を企て〉ることがその目的であったと述べているのである。そして、〈有島はこの詩のように、「人々が愛の触角をもつと公然と思うままに働かすことが出来たら、私達の生活の相はもつと異なるにちがひない」と解説している。この「愛の触覚」を働かすことこそ有島が第二稿「惜みなく愛は奪ふ」において確信した本能的生活

の精髄だったわけで、むしろホイットマン詩の紹介というよりは、有島の愛の理論の敷衍であったと言うべきであろう〉、とも述べているのである。

それは言うまでもなく、〈神の座を得た愛とも言うべき第二稿「惜しみなく愛は奪ふ」の愛をホイットマン詩を借りて述べたにすぎなかった〉ものだからだというのである。

鈴木氏は、詩篇〈時たま私の愛するものに対して〉については、〈（第五番詩と同様に）内部の声を表現しようというところに情緒が働いていたと見るべきであろう〉[註8]とも述べておられるのであるが、〈神の座を得た愛〉という表現とともに、有島の愛の絶対性の表現としての〈時たま私の愛するものに対して〉であるという解釈は、この詩が「惜みなく愛は奪ふ」のエピグラフとして掲げられていることの積極的な意見として興味深いところなのである。

三

愛は、元来関係概念である。それにもかかわらず、有島の愛の論理が、すでにみてきたように関係概念としての意味は失われているものでありながら、なお意味を持っている概念として位置付けられるとするならば、それは関係概念とは異なった、たとえば場としての意味をもった概念か、あるいは一方的な強制力（支配力）をもった存在として位置付けられるものへと変化をとげている概念であるはずである。ともかくも「惜みなく愛は奪ふ」においては、関係概念から解放された新しい概念としての愛の論理が展開していることになるのではないだろうか。

もしそうだとするならば、その心づもりは、有島の「惜みなく愛は奪ふ」自註のなかに当然述べられているのではないかと思われる。さらに、そのところに、先に述べた鈴木氏の意見に対して、有島自身がいかに答えるかと言う一種の解答の可能性をみることができるところでもある。

あの論文が出版せられてから読み返して気がついたことだけれども、あれは現在私の持ってゐる心持ちを積極的に現はした積もりでゐたのだつたが、強ちさうでないのに気がついた。あれは私自身の偶像破壊の運動であつたのだ。私の価値判断の標準の変更であつたのだ。あれから出発して私の究極的な哲学は組み立てられねばならぬのだつた。それが十年の後に成就されるか、二十年の後に到達されるか、それは私自身にも判りません。私は兎も角あの方面に自分の生活を導いて行きたいと思つてゐます。〔書後「旅する心」跋大9・11〕

「惜みなく愛は奪ふ」の自註としてよく知られているものであるが、とくに〈あれは私自身の偶像破壊の運動であつたのだ〉という一文は注目に値するものである。〈偶像破壊〉とは、神秘化されたもの、絶対化されたものの価値を根本的に否定するということなのだから、ここには確かに鈴木氏の言われるように〈奪ふ愛〉が従来の〈神〉（絶対的な基準）、換言すれば、〈調和〉を本質とするところの愛の論理にとって変わったことが記されていることになる。

しかし、翻って考えてみるに、調和をその本質とする愛の論理が、否定されているということは、愛の本質として、それ意外の可能性を新たに付与するということであり、その意味では愛の不可能性を説くこと以外は何と言い換えても愛の論理の絶対化であることを免れることはできないのではないかと思われるのである。それは〈世上通例の愛の観念を含めて、その本質を逆転させた伝統否定と反逆的姿勢の象徴〉[註9]なのである。このことに関して、たとえば、〈愛は惜しみなく奪うと嘆いた作家の生涯についての、精神病理学的探究はおそらくこのこと(ひとりじめの愛)を明らかに示すのではあるまいか。／母を失ったときの「幼き者」に示された彼の心温まる配慮は、そのなかになにか女性的なものを感じさせる。彼の愛人との死の意味も、この愛の特異性の点を無視しては考えられないであろう。母なる自然への合一のなかに復帰することこそ、自らの選んだ死の意味であったのである〉[註10]という考え方もある。まさに愛が神の座を獲得したのでなければこうは言えないはずである。有島が〈私の価値判断の標準の変更であったのだ〉と言うところに、そのことが明確に示されているのである。

有島のこの愛の論理を、一種の芸術論として考えた場合、関係概念としての位置づけを逸脱することができるのではないかと思う。たとえば、〈余録〉として収録されているいくつかのエッセイのなかに、「芸術を生む胎」〔大6・10〕[註11]があることは、暗示に富んでいることである。

しかし、人間論としてみた場合、それは魂論と同様の筆法をもってするならば、〈調和〉破壊論として位置づけることができるのではないだろうか。このところで、先に「惜みなく愛は奪ふ」エピグラフ分析をとおして提出した問い、人間存在の否定的側面をも肯定へと転じうる第三の基準の確立の可能性が、再び問われてくるのである。有島にとって、それが何であるのか、エピグラフとして掲げられているホイットマン詩の可能性を再び問わなくてはならないところである。

少なくとも、自註においては、〈生活がかはつたらもう一つ徹底的なのを書く〉〔原久米太郎宛書簡　大9・6・12〕と述べているところもその一例であろうが、生活が変わらなくてはならないと言うことは、愛の論理の可能性は、現在はまだないと言うことであって、愛には生活を変えることのできる条件としての位置付けはなされていないのである。

それからもう一つ、〈少くとも「愛は与ふ」といふより「奪ふ」といつた方が遙かに真に近い表現であるといふことが分かつていたゞけると思ひます〉「書後『旅する心』跋」と述べているように、〈愛は奪ふ〉という表現が、必ずしもベストであるとは言っていないことも注目に価することである。

先にも触れた石坂養平あての書簡にみられる、「惜みなく愛は奪ふ」の自註については、石坂の「惜みなく愛は奪ふ」評に対する返事でもあるので、諸家の評を取り上げる折りに、詳述したいと思うが、有島のいう〈あんな不完全な感想〉とはたんなる謙遜ではなく、文字どおり思想の未完成性に対する否定的な言辞であろう。

私達の愛は未熟で総てのものを価値あるやうに見る事が出来ないだ

けだと思ひます。ロダンが自然は総て美しい、人が如何に醜いというものでも自分には美しいといつた言葉などを私は考へずにはゐられません。〔石坂養平宛書簡　大9・6・24〕

もその意味で興味深い表現である。なればこそ、有島自身の事柄として、〈表現と本質との御言葉は私を考へさせます。さうです。愛は奪ふといはずに、愛は常に自己に与へるものだといつた方がいゝかもしれません。然し自己を築き上げるには他から奪はねばならぬのです。奪ふといふ結果に実際なつてゐるのです。私のカナリヤの例をもう一度お読み下されば其点はつきりすると思います〉〔同前〕という自己完成志向として実感されていたことだったのである。

それと同時に、そのことは有島にとっては、実は、〈私は兎も角あの方面に自分の生活を導いて行きたいと思つてゐます〉と言っているように、あらまほしき未来の姿として位置付けられているものなのである。〈あれは兎に角僕が勢一杯に自分の人生観を書き表はして見たもので、僕はあれで人間の生に対する態度をいくらかでも創りなほさうと思つてゐるものだ〉〔足助素一宛書簡　大9・5・9〕と言っているように、現在、すでにそれが成就しているとはけっして述べてはいないのであり、それがいつ可能になるのかをもあわせて問わなくてはならない者であることを表わしているのである。

四

以上、「惜みなく愛は奪ふ」を、そのエピグラフ解釈の可能性の考察と、自註分析を中心にして論じてきたのであるが、この問題がいかなる展開を見せるかについては本文の分析を試みなくてはならないのである。しかし、もはや許されている紙幅は尽きたので、そのことは、次の機会に試みてみたいと思う。

「惜みなく愛は奪ふ」が「或る女」の理論篇であると位置付けたのは山田昭夫氏であるが、[註12] それは、総括であると同時に予測をも含んでいるものであるにちがいない。また、「或る女」が有島文学のエッセンスであるという意味において、「惜みなく愛は奪ふ」分析は有島の精神史の軌跡を全円的に捉えるための展望台的意味を持っていることになるのである。したがって、「惜みなく愛は奪ふ」分析を通して、新たなる可能性追及の具体的な問題発見もまた可能になるのである。

【註】

1　上杉省和「『運命の訴へ』論」〔有島武郎―人とその小説世界―』昭60・4　明治書院刊所収〕

2　①「『聖餐』論」〔『有島武郎の文学』昭49・6　桜楓社刊所収〕

②「有島武郎研究―著作集第十輯『三部曲』をめぐって―」〔昭61・11・1　梅光女学院大学「日本文学研究」第22号〕

3　「予想」〔カーライル選集・Ⅰ『衣服の哲学』昭37・5　日本教文社刊　第一巻第十一章〕

4　「コロサイ人への手紙」三章9～10節

5　「有島武郎とホイットマン」〔亀井俊介『近代文学におけるホ

イットマンの運命』昭45・6　研究社刊所収〕

6　鈴木保昭「漱石のホイットマン論一考」〔『白樺派の文学とホイットマン』昭52・7　東京精文社刊所収〕

7　「訳詩「ホイットマン小詩」（十二篇）と『星座』執筆」〔鈴木鎮平『有島武郎におけるホイットマンの相貌』昭57・6　明治書院刊所収〕

8　「講演筆記「ホイットマンに就いて」をめぐって」〔同前〕

9　山田昭夫「惜みなく愛は奪ふ」補注　『日本近代文学体系』33　有島武郎　昭45・3　角川書店刊〕

10　懸田克躬『愛について』中央公論社　昭43・11〕

11　有島武郎著作第十一輯にはメインのエッセイである「惜みなく愛は奪ふ」のほかに、十編のエッセイが余録として収録されている。その配列を見るときに（今はそれを示す紙幅はないのであるが）、収録されている位置からすると、「惜みなく愛は奪ふ」の次に付録の形で置かれているのであるが、内容から考えると、有島は、「惜みなく愛は奪ふ」論の序論として、これらの十編の短編エッセイを前置しているのではないかと思われるのである。あるいはまた、未定稿「惜みなく愛は奪ふ」が発表されたのが大正六年六月であるから、その間の有島の愛に関する思想の変遷を自ずから物語っていることにもなるのであるが、以下、この十編のエッセイのテーマについて考えてみることによって、「惜みなく愛は奪ふ」のテーマを考察するひとつの手掛かりを得ることができるようにも思われるのである。それは、置かれている位置から考えて、「惜みなく愛は奪ふ」論の一種の応用編として位置付けることになるのかもわからない。

なお、この余録に関する有島の発言は、大正九年四月十二日付の足助素一宛書簡にあるが、積極的に内容を説明しているものではない。

12　「或る女」〔近代作家叢書『有島武郎』昭41・1　明治書院刊所収〕